

外集団尊敬に対する愛着不安傾向の効果

Effects of attachment anxiety tendency on respect to outgroup

熊谷 智博¹

¹大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科

Tomohiro Kumagai¹

¹Department of Communication and Culture, Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：外集団尊敬，愛着不安，集団間和解

Key words : Respect to outgroup, Attachment anxiety, Intergroup reconciliation

抄録

本研究では集団間紛争を解決し和解を促進する要因として、外集団に対する尊敬に注目し、それと特性としての愛着不安傾向の関係を検討した。大学生135名を対象に特性的愛着不安傾向、一般的安心感、対処能力への自信、外集団に対する尊敬に関する質問項目への回答を求めた。回帰分析結果は愛着不安傾向が一般的安心感を弱め、それが外集団尊敬を弱める事を示していた。特性としての愛着不安が集団間紛争解決に与える影響の可能性が議論された。

1. 背景

1.1 集団間紛争と外集団イメージ

集団間紛争は多くの場合暴力を伴い、それによる被害者を生み出し続けるという点から、現代社会において解決すべき重要な問題であると言える。社会心理学はこの点について多くの研究を行っており、一定の成果を得ている。例えば Sherif et al.^[1]の泥棒洞窟実験では、対立が激化した集団に他集団との「上位目標」を設けると、協力経験を通じて外集団に対する友好的態度が形成されることを報告した。このように集団同士であっても、環境を整えることができれば集団同士の接触によって協力的な集団間関係の構築が可能である事が報告されている。

集団間の接触が集団間紛争解決によって有効であるのは、それによって外集団に対するイメージが変化するためである。集団間接触によってこれまでの対立を通じて形成された否定的イメージやステレオタイプが変化し、外集団成員や外集団全体に対してより好ましいイメージを持つことができるようになる。それが協力的な集団間関係の構築に対する積極的な態度を生み、集団間紛争解決が促進される。反対に外集団に対する敵対的イメージを持ち続ける事は集団間紛争を継続させるだけでは無く、その解決を困難にする。更に集団間

紛争を解決するには外集団に対する危害を止め、お互いの妥協点を探り、最終的には和平状態を形成・維持する為の協定を設けて、それを遵守する必要がある。しかし外集団に対する敵対的なイメージは外集団に対する不信感を生むので、外集団はその協定を遵守しないだろうと推測し、それによって集団間紛争の解決は困難となる。従って、対立集団に対する否定的なイメージを肯定的なイメージへと変える事は単に対立を止める、あるいは成員内にある敵対的な態度を弱めるというだけではなく、将来に向けた、長期的な集団間紛争解決に取り組み際に特に重要な要因である。

集団間紛争解決に寄与する外集団に対する肯定的なイメージには、信頼性や道徳性など多様なものが考えられるが、「尊敬に価する」というイメージも有効であると考えられる。ステレオタイプ内容モデル (Fiske et al.,^[2]) によれば、尊敬とは対象集団の有能さと温かさの両方を高く認知した場合に生じる感情である。集団間関係において外集団の有能さの判断は競争、更には対立相手としての能力の高さに関する評価に影響を与え、通常警戒心を喚起させる。それに対して温かさは敵対的意図の判断に影響を与え、温かい集団と認知された場合、敵対的意図は低いと判断される。従って外集団に対する尊敬は非敵意的でありながら能力の

高い集団となり、協力関係を形成するには望ましい相手と判断された相手に向けられる。

しかし紛争状態にある集団の成員が、相手集団に対して尊敬の念を抱くのは困難である。上述の通り、尊敬の感覚は相手集団の能力の高さを認める事を意味する。このような対立集団に対する高評価は相対的に自集団の評価を下げる事になる。それはその集団の社会的アイデンティティの低下を介して成員にとっては心理的脅威となる (Tajfel et al.,^[3])。そのため、例えば外集団成員は高い技術力を持っている一方で、社会的弱者に対して積極的に援助を行う (つまり高い温かさを備えている) といった、外集団成員が尊敬に値する人々であるという情報に接したとしても、それを肯定的には認知しようとはしないだろう。むしろ自集団の社会的アイデンティティを維持する為に、相手の高い能力は自集団の単なる模倣である考えたり、社会的弱者に対する援助は他国の目を気にした偽善であると考え外集団に対して低い評価をする事で、相対的に自集団の評価を高める事に利用する事が考えられる。このように相手集団に関する情報を操作する事による相手集団に対する尊敬を高めようとする取り組みは困難と考えられる。そしてそれが自集団の社会的アイデンティティに関する脅威によるものであるならば、そのような脅威を喚起しない取り組みを生み出す事が必要となる。

1.2 安心感と尊敬

社会的アイデンティティ理論によれば、集団間関係から生じる心理的脅威とは自尊心の低下である (Tajfel et al.,^[3])。自集団に対する評価の低下は、その成員の自己認知も低下させ、その結果自分自身に対する肯定的評価である自尊心も低下する。従ってこの自尊心の低下を抑制する為に自尊心を保護する心理的障壁を設ける、或いは自尊心を下支え出来る心理的基盤を持つ事が出来れば、外集団を否定的に認知し、内集団を肯定的に認知するという集団間バイアスは抑制できると考えられる。その結果、外集団が尊敬に値する存在であるという情報に接した際に、それを正確かつ客観的に処理する事が出来るようになるだろう。

自尊心への脅威を弱め、外集団に対する尊敬を高める心理的要因としては安心感が考えられる。社会的比較によって自集団の評価が低下し、社会的アイデンティティへの脅威が生じるとしても、個人的には対人関係を上手く処理していく自信があれば、自己の評価が下がらないと個人は考える

事が出来るだろう。そのような個人の能力や評価に関する自信は日常場面一般において安心感として知覚される。従って日常生活において高い安心感を備えている人は、集団間紛争から生じるそのような外集団に対するバイアスの影響を受けにくくなると考えられる。そして外集団が尊敬に値するという情報に接した場合には、それを正確に処理できるので外集団に対して尊敬の念を抱きやすいと推測出来る。

また安心感と似ているが、より個人的能力に基づく自信として、対処能力への自信が考えられる。対人関係以外の困難な状況に関してもそれに対処する能力が高いと考えている人は、自集団とは異なる規範や価値観を持つ外集団成員、特に紛争状態にある外集団成員との接触に対しても、自分には問題を処理する能力があると考えよう。従ってそのような集団間接触から生じる相対的評価の低下を心配しないと考える。その結果安心感と同様に、外集団に対する尊敬を持ちやすいと推測出来る。

1.3 愛着不安

安心感が外集団に対する尊敬を生むとして、そのような安心感はどのようにして獲得されるだろうか。基本的に安心感は人々が現在の自分自身の状況と能力に対して持っている認知によって決まる。しかし安心感の場合は特にこれまでの発達過程において対人関係上どのような葛藤を経験し、それをどのように解決し、そしてその結果からどのような評価を得てきたかによって個人差が生じる。例えばこれまで経験した対人関係を上手く処理できた場合には問題無いが、その処理に失敗した場合には、失敗という経験とそれに伴う周囲からの評価低下が心理的脅威となる。但しそのような脅威を処理する経験を通じて脅威のダメージを軽減することを学習すれば、それは将来に対する安心感を高めると考えられる。その結果、その人は対人関係を中心とした日常生活全般における安心感が強まるだろう。また対処能力への自信に関しても、対人関係に限らず日常場面で生じる問題、例えば仕事がスケジュール通り進まないなどの問題を上手く解決してきたという経験は、対処方略に関する知識だけでは無く、その知識に基づく自信を生むと考えられる。従って対処能力に対する自信も個人がこれまでの日常場面でどのような経験を為ってきたかに依存する。このように人々の安心感個人は個人の社会生活環境によって左右されるが、

その一方で、個人の特性として安心感を持ちやすい者と持ちにくい者という個人差が生じる者でもある。特に集団間関係も含め、対人関係に対する安心感はその人の発達過程において形成された特性によって影響を受ける。対人関係に影響を与える心理的特性は様々なものがあるが、その中で大きな影響力を持っているのが他人に対する愛着への不安傾向である。

愛着への不安傾向は別離の恐怖や愛情に対する絶望的な願望、他者への高い依存性、そして怒りの表出の抑制に関する個人差である。この愛着不安傾向の高い人は対人関係において他人からの受容可能性を低く見積もり、その結果、適切な対処ができずに対人関係を悪化させてしまう。更にはそのような不適切な対処に対して敵意、怒り、悲しみ、落胆といった否定的感情反応を取りやすい。他人に対する攻撃傾向に関してもこの愛着不安傾向の影響が報告されており、Allen, et al.^[4]によれば愛着不安傾向の高い人は他人からの注目を集めたり、面倒をみてもらいたいという気持ちから怒りや憤りの表出を伴った反社会的行動を取りやすい事が報告されている。この愛着不安傾向は安心感の低下を介して外集団に対する尊敬も低下させると推測できる。そこで本研究では愛着に対する不安の強さは外集団に対する肯定的な認知を阻害し、それが結果として外集団に対する尊敬を低下させると予測し、質問紙調査によってこれを検証する。

2. 方法

2.1 参加者

日本の大学生 136 名（男性 28 名，女性 103 名，平均年齢 19.3 歳）が調査に参加した。

2.2 心理変数の測定

各回答者の愛着不安傾向を測定する為に、Mikulincer^[5]の愛着不安尺度より「私は他人にほったらかしにされると心配になる」「私は自分の人間関係が上手くいっているか不安である」「私は自分がどう考えているかを他人に伝えるのが好きではない」の 3 項目を用いた。この 3 項目に対して「1：全く当てはまらない」から「7：非常によく当てはまる」の 7 件法での回答を参加者に求めた。

一般的安心感を測定する項目として「私は、自分自信にだいたい満足している」「時々、自分はまったくダメだと思う事がある（逆転項目）」「私に

は結構長所があると感じている」「私は、他の大半の人と同じくらいに物事をこなせる」「私には誇れるものが大して無いと感じる（逆転項目）」「時々、自分は役に立たないと強く感じる（逆転項目）」「自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だ」「自分の事をもう少し尊敬できたらいいと思う（逆転項目）」「よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう（逆転項目）」「私は、自分のことを前向きに考えている」の 10 項目を用いた。この 10 項目に対して「1：全く当てはまらない」から「7：非常によく当てはまる」の 7 件法での回答を参加者に求めた。

対処能力への自信を測定する項目として「ものごとが思ったように進まない場合でも、私はその状況に適切に対処できると思う」「危機的な状況（人生を狂わせるような）に出会ったとき、自分が勇気を持ってそれに立ち向かって解決できるという自信がある」「今の調子でやっていけば、これから起こることにしても対処できる自信がある」の 3 項目を用いた。この 3 項目に対して「1：全く当てはまらない」から「7：非常によく当てはまる」の 7 件法での回答を参加者に求めた。

外集団に対する尊敬を測定する項目として、本研究では中国人を外集団成員として、「以下の点について、あなたはそれぞれどれくらい中国人に特徴的だと思いますか。」という質問を用い、その中の「尊敬できる」「立派」の 2 項目に対する得点を用いた。この 2 項目に対して「1：全く特徴的ではない」から「7：非常に特徴的」の 7 件法での回答を参加者に求めた。

3. 結果

愛着不安傾向 3 項目（クロンバッハの $\alpha = .632$ ）、一般的安心感 3 項目（クロンバッハの $\alpha = .832$ ）、対処能力への自信 3 項目（クロンバッハの $\alpha = .791$ ）、外集団尊敬 2 項目（相関係数 = .791）のそれぞれの平均得点を求め、それぞれの心理要因の得点とした。

愛着不安傾向の低さが現状に対する安心感と状況変化への対処能力への自信を介して、外集団成員である中国人に対する尊敬を感じやすくさせる過程を検討するためにパス分析を行った。始めに外集団尊敬得点を目的変数、愛着不安傾向得点、一般的安心感得点、対処への自信得点を説明変数として重回帰分析を行った。続いて一般的安心感得点、対処能力への自信得点をそれぞれ個別に目

的変数として、愛着不安傾向得点を説明変数として回帰分析を行った。その結果は図1の通りであった。愛着不安傾向得点から一般的安心感、対処能力への自信得点への負のパスが有意であった。また一般的安心感得点、対処への自信得点の両方から外集団尊敬得点への正のパスが有意であった。

4. 考察

本研究の目的は、集団間紛争解決に有効な感情となるであろう、外集団に対する尊敬を喚起する心理要因としての安心感に注目し、それが対人的愛着不安傾向によって影響を受ける事の検討であった。結果は愛着不安の低い人ほど日常生活全般に対して安心感を持っており、更にトラブルに対して自分が対処できるという自信を強く持っていることが示された。しかしながらそれらのうち、一般的な安心感だけが外集団に対する尊敬を強めており、トラブル対処に対する自信は外集団への尊敬とは無関係であった。

愛着不安傾向が安心感を介して集団間関係に影響することは集団間紛争解決に対するアプローチの多様性を示していると考えられる。愛着不安が人々の攻撃性に影響を与える事は Allen et al.^[4]が報告しているが、それが集団間紛争レベルの問題とも関わってくる事を本研究は示したと言える。愛着不安傾向は一般的安心感と対処への自信を弱めていたことは、本論文の中で予測した通りの結果であると言える。親子関係を中心とした愛着経験が、不安傾向という個人特性に影響を与え、それが成人後の生活や行動全般に対して影響を与えてしまうことは、個人的経験と集団的態度の関連性を示唆するものである。つまり本来愛着に関する個人的経験とそれによる愛着不安傾向とは対人関係上の問題であり、基本的には集団内の人間関係に関わるミクロレベルの心理過程である。しかし本研究が示しているのはそのようなミクロレベルの対人的問題が、集団間態度にも間接的には言え影響を与えているという事である。この事は集団関係、特に集団間和解の為に必要な対処方法の複雑さを示しており、真の意味での和解を達成する為には単に外集団に目を向けるのではなく、内集団の教育レベルにも目を向ける必要がある事を意味している。

但し本研究においては愛着不安傾向から一般的安心感、対処への自信への回帰係数が中程度でありながら、決定係数は低かった事から、実際には

人々の安心感はもっと多様な要因によって形成されており、特性としての愛着不安傾向が多大な影響力を持つとは言い難いという結果がであった。この事は愛着不安傾向と集団間紛争解決の関係があまり強いものではないという事を示唆しているが、同時に全く無関係ではないとも言えるだろう。特に本研究では愛着不安傾向を個人レベルの項目を用いて測定しているが、集団に対するコミットメントに対する不安傾向、さらには集団レベルの安心感の測度も設けて回答を求めべきであったかもしれない。その場合には個人レベルと集団レベルでの愛着不安—安心感の関係を比較すれば、この点に関する心理メカニズムをより詳細に検討できただろう。この点については将来の研究にて再検討したい。

外集団に対する尊敬を高める要因として、本研究での予測に反して対処能力への自信の高さは影響力を持たなかった。一般的安心感は弱いながらも効果が示された点から、外集団に対する肯定的なイメージを受け入れる心理的余裕を産むのは、困難な状況に対処するノウハウとしての知識ではなく、そのような能力に依存しない自己認知である事を示唆している。言い換えると例え直面している問題に対して上手く処理する事が出来ないとしても、それによって他人からの評価を失う事は無いという信念を持っていると推測出来る。この場合、そのような信念の根拠としては2つが考えられる。1つは、自分は失敗しても他人からの評判を落とさないように、その後の対処を上手くとることが出来るという自信、もう1つは他人は失敗に対してすぐさま他人に対する評価を変えるような、単純な人々では無いという一種の信頼感である。本研究ではそのどちらの要因が働くのかは本研究では検討できなかったが、この点は心理的余裕と外集団に対する態度という重要な問題と関連して、今後検討が必要となるだろう。

上述の通り、本研究では弱いながらも安心感が外集団に対する尊敬の感覚に影響を与える事が示唆された。集団間紛争解決の研究において、不安や恐怖、脅威といった否定的感情が与える影響については多く検討されてきたが、肯定的感情の影響についてはそれほど多くはないと言える。安心感は不安の単なる裏返しかもしれないが、単なる正反対とも言い切れない。なぜならばプロスペクト理論 (Kahneman et al.,^[6]) が主張するように獲得と損失は同じ強さではない事が知られており、

それに従えば、不安に比べて安心は弱い影響力しか持たない事になる。しかし安心感が集団間紛争に与える影響を検討する利点は、それが人々にとっても望ましい感情であるという点である。低下させるにしても不安を操作する事は、紛争当事者の否定的感情を扱わなければならない、それに対する心理的抵抗も考えられる。それに対して安心感是人々が積極的にそれを獲得しようと動機付けやすいという特徴があり、そこから集団間紛争解決への新たなアプローチが模索できるだろう。安心感をより詳細に、そしてより紛争解決に適した要因として扱うには、今後更なる研究が必要となるだろう。

5. 引用文献

- [1]Sherif, M. et al., Intergroup conflict and cooperation: The robbers cave experiment. Institute of Group Relations. 1961.
- [2]Fiske, S. T. et al., (Dis)respecting versus (dis)liking: Sstatus and interdependence predict ambivalent stereotypes of competence and warmth. Journal of Social Issues, 1999,55, 473-489.
- [3]Tajfel, H., et al., An integrative theory of intergroup conflict In W. G. Austin, & S. Worchel (Eds.), Psychology of intergroup relations. Brooks/Cole. 1979, pp. 33-47.
- [4]Allen, J. P. et al., Attachment and adolescent psychosocial functioning. Child Development, 1998, 69, 1409-1419.
- [5]Mikulincer, M.. Adult attachment style and individual differences in functional versusdysfunctional experiences of anger. Journal of Personality and Social Psychology, 1998, 74, 513-524.
- [6]Kahneman D. et al., Prospect theory: An analysis of decision under risk. Econometrica, 1979, 47, 263.

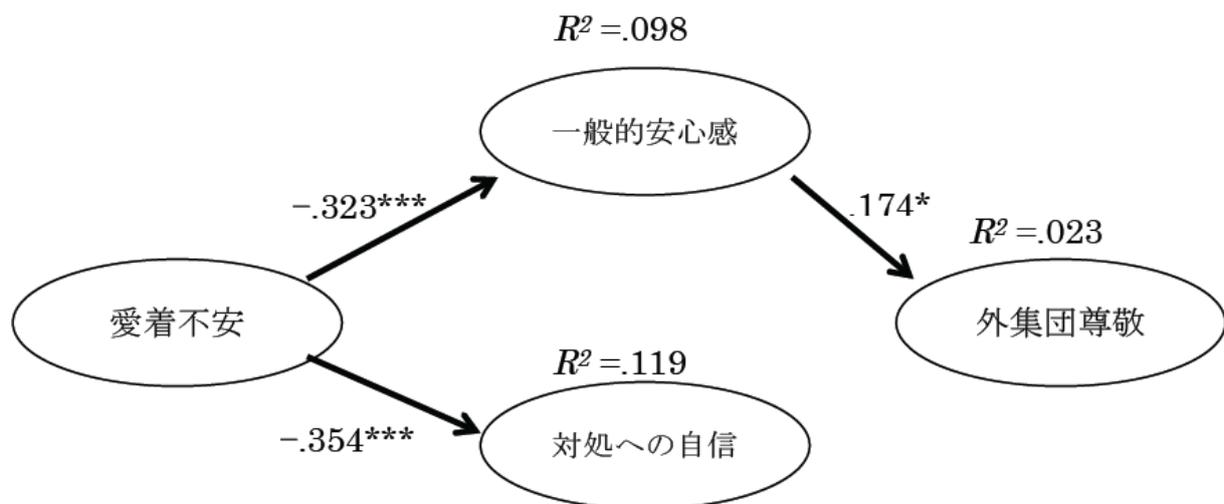


図1. 愛着不安傾向が外集団尊敬に与える効果のパス分析結果

Abstract

In this study, I focused on respect to outgroup as psychological factor that would resolve and engender reconcile intergroup conflict. Especially personal trait of attachment anxiety was focused for that process. One hundred thirty-six undergraduate students answered questions concerning attachment anxiety, general sense of secureness, confidence on coping skill, and respect to Chinese. Results were indicated that attachment anxiety weakened general sense of secureness, and then it weakened respect to Chinese. The relationship between personal trait of attachment anxiety and intergroup conflict resolution was discussed.

(受付日：2016年12月8日，受理日：2016年12月16日)

熊谷 智博（くまがい ともひろ）

現職：大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科准教授

東北大学大学院文学研究科博士後期3年の過程（人間科学専攻）単位取得後退学
専門は社会心理学。現在は集団間紛争解決を促進する心理的要因を研究している。
主な著書：基礎からまなぶ社会心理学（共著，サイエンス社）